国労はかた

NO.148
(2)
2021.9.3

国鉄労働組合博多地区本部
責任者／中村和浩
編集者／教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多201

井上　喜代彦代議員
（南福岡運転区）

今年８月の大雨については気象庁から命を守る行動との報道がある中、何故運行を強行したのか？運行管理部も入れ替わりが多く、安全に対する対策や過去の教訓が語りつがれていないのではと思ってしまう。会社として、今回の事象の問題点や対策をどうするのか明確にして欲しい。また、こうした長時間の災害でテレビからの情報がないのは非常に不便である。会社に対して全て戻せとは言わなくてもいいが、主要駅の乗り継ぎ詰所には設置するようにしてもらいたい。組織拡大について、昨年の年末手当や今年の夏季手当が大幅減額となった際には、若手が反発してチャンスだと思ったが、それもかなわなかった。つい先日、他職場の若手乗務員が初対面であるにもかかわらず、会社への不満や仕事で分からないことについて積極的に話をしてくれた。今後もこうした若い人との関わりを大事にしながら組織拡大に繋げていきたい。

青年のひとりごと

「挨拶が出来ない者は仕事も出来ない」という説は至るところで耳にします。私はかつて、こうした話を聞くたびに「挨拶と仕事は全く別物。こんなのただの精神論」と思っていましたが、この考えは日本人の労働観と照らし合わせると実に愚かです。というのは、日本の企業は欧米とは違い、特定のスキルを有した者ではなく、組織と「一体」になってあらゆる仕事を引き受けてくれそうな者を採用します。このことから、日本の企業で評価されるのは「空気」を読める人物であり、他者とのコミュニケーション能力は、「横の関係」を良好に保つ上でも極めて重要です。ご存知の通り、挨拶というのが「私はあなたのことを認めています」という意思表示である以上、それをしなければ、単にコミュニケーションの拒絶に止まらず、「私はあなたを認めません」という「存在の否定」をも意味するため、相手に与える印象の悪さは計り知れません。問題はここから。「確証バイアス」という心理学上の概念がありますが、これは簡単に言うと「自分にとって都合のいい情報ばかりを無意識的に集めてしまう傾向」のことを指します。つまり、人間というのは、嫌いな人がいたら、その人の「悪い所」ばかりを見ようとするため、普段はいかに仕事を正確にこなす人であっても、時折見せる「失態」だけが強く印象に残り「あいつはダメだ」となります。このように、仕事が「出来る人」「出来ない人」というのは、周囲の先入観によってほぼ決定されてしまうわけです。ところで、中には、同じ職場の人にきちんと挨拶をしておけば、それ以外の人には挨拶を返す必要すらないといった考え違いをする方もおられますが、これは非常に危ない。というのはこの場合、彼らにとっての「挨拶」とは単なる「自己防衛」の手段に過ぎず、必然的に他者を承認するという社会行為の機会が激減するため、自分が社会の一員であるという意識も希薄になります。「立場」を守るための「負のエネルギー」、他者を蔑ろにする「社会性の欠落」。社外におけるトラブルや犯罪は、こうした要素が相まって起きるものではないでしょうか。

○当面する行動
○　９月１５日（水）１４：００～/解放共闘幹事会　福岡自治労会館４F
○　その他未定